



発行所  
〒792-0835  
新居浜市山根町8番1号  
曹洞宗瑞應寺専門僧堂  
編集発行人 村上 徳 存  
電話(0897)41-6563  
FAX(0897)40-3127  
毎月1日発行  
(振替 01330-2-31918)  
瑞應寺  
印刷所 東田印刷株式会社

# 碧巖録物語独語【十五】

後堂 門原 信典

## 三教老人の序④

### 「ロバの仕事、馬の仕事」

道元禪師が慕古の勝蹟と尊敬された長慶慧稜(八五四〜九三二)禪師は、浙江省、塩官の生まれ、俗姓は孫氏、生まれつき純朴で落ち着いた性格の人であり、十三歳のとき蘇州の通玄寺で出家し、各地の禅の道場に歴参されます。靈雲志勤禪師の元で修行中「如何是佛法大意(いかなるかこれ、佛法の大意)と質問されます。

この問いは一般の寺院での晋山結制で新任職が須弥壇に上り、多くの若いお坊さんとの問答でよく聞かれる問いで

す。「いかなるもこれ佛法」と答えても大正解ですが、新任職の境界があらわれる問いです。しかし、この慧稜禪師の問いは悩みに悩み、葛藤の末に生まれた問いです。

大意というのは大まかな意味ではなく、大なる意。佛法には大まかな意味も細かい意味もありません。靈雲禪師の答えは「驢事未了、馬事到来」(驢事未了らざるに、馬事到来す) 驢事とはロバの仕事、馬事は馬の仕事。ロバも馬も家畜として五千年前から活躍していたそうですが、当時の生活には欠かせない存在でした。

靈雲禪師は「ロバの仕事が終わらないうちに今度は馬の仕事だ、忙しいことだ」と答えられました。

これは佛道修行が絶え間なく継続していることなのですが、実は私の生命こそ寝ている時も、休むことなく次から次へ活動し続けているということ。つまり行住坐臥の生活全てが佛法という事です。僧堂における行持もその通りで、例えば私たちがお経を読む時には「まかーはんにやはらみつたしんぎよー」と先ず維那和尚という役目の人が先達で声を出します。その「しんぎよー」の声が切れないうちに「かんにじーさいぼーさつ…」と鐘と木魚を合図に読経が始まります。終わっても「ぼーじーそわかーはんにやーしんぎよー」から声を切らずに「しんぎよー」から「じようーらーいー(上来)」と維那和尚の回向が始まります。

「読経未了らざるに、回向到来」です。そして、合図の鐘の響き、木魚の音も含めて、み佛様の音が途切れない事が大切なのです。

僧堂の一日は夜坐から始まり、そして就寝の偈、打眠、起床偈、振鈴、洗面、用廁(お手洗い)。朝の坐禅、朝課と続きますが、一つ一つは個々独立した行いですが、佛祖の行持として途切れることなく次の行持の始まりでもあり、鳴物に従って一つにつながっています。そこに私の勝手な計らいは入り方が無いのです。

先月号でも紹介しましたが、正法眼蔵行持の巻には「疑滞を疑滞とせること三十年」とあります。長慶慧稜禪師は、その一事「驢事馬事」という疑滞に徹して三十年。疑滞は凝滞とも書きますが、疑問にこだわります。いい加減にしない事です。

そして雪峰義存禪師と、その補佐をされていた玄紗師備禪師に参じて問い続け、更に坐蒲が二十枚も破れるほど坐わり続けられたのです。

ある日涼簾が巻き上がる時、この「驢事馬事」つまり「佛法の大意」を認得され次の頌を読まれます。

也大差、也大差(やたいしゃ、

やたいしゃ)。巻起簾来見天下。(簾を巻起し来たつて天下を見る) 有人问我解何宗(有人问我に何れの宗を解すやと問わば) 拈起扞子劈口打(扞子を拈起して劈口に打たん)

也大差は也大差とも書きますが「また、はなはだ たがう」で「ずいぶんと劣っている」つまり、真実に目覚め自分が未熟だった事に気付く驚きの表現です。理解しているからこそ生じる疑問。それがあって「也大差」という法悦(佛法の喜び)に出会うのです。私達の修行はこの疑滞と也大差の連続。ですから、死ぬまで「わかった、わからん」「わかった、わからん」の連続です。

ひよつとしたら「わかった」未了らざるに、「わからん」到来す」かもしれませぬ。

「なんということだ！ そうだったのか！ 僧堂の涼簾が巻き上がった途端に夜が明け大自然も静けさから開放される大開静だ。

私の眼も開いて天下(世界)が見えた。これこそ私の開眼だ。もし誰かが私にどんな真実がわかったかと問うならば、

目の前に仏子を立てて、その開いた口に打ちつけよう」

庫院に吊り下げてある唐金という合金で出来た雲の形をした雲版と云う鳴物があります。大開静は、その雲版と僧堂の木版を交打し、だんだんリズムを早くして暁天坐禪(早朝の坐禪)の終わりを告げる事です。

開静とは静慮(坐禪)から開放される意味ですが、文字の通り「静けさが開く」という表現がピッタリです。

そして私達の行持は坐禪から出発します。坐禪と云う佛様の確かな裏打ちがあつて一日二十四時間が佛行となるのです。

仏子は、もともとインドで麻や動物の毛などを束ねて柄を付けて蚊や虻などを払う為に用いたもので、中国に伝わり、束ねた麻や毛をお釈迦さまの螺髪(髪の毛)にみたて、煩惱や災いを払う功德を持つ佛具。また、説法の時の大切な佛具と成りました。

「いつ誰が何を尋ねてきても、私の説得は一つ。ただ黙ってその人の眼前で仏子を立てるだけだ。誰にも何も言わせ

ないぞ」劈口は口が開く。

この仏子を立てるといふのは、説法をしている事。説法とは法を説く、法とは佛道修行です。今、此処で、この私が佛道を説いている姿です。

「これこそが悟りです」と持ち出すことも見せることも出来ない「驢事馬事」と云う何の変哲もない無我の働きこそ佛法だったので。

雪峰禪師はこの頌を玄沙禪師に見せて「此子徹去也未可。(この子徹せりや) 慧稜和尚は佛法に徹しただろうか」と

確かめますが、玄沙禪師は「此是意識著述。(これは是れ意識の著述) これはまだ感覚と頭の中だけの話で坐禪に徹したとは言えない」「更須勘過始得(更に須らく勘過して初めて得し) さらに深く見極めなければ会得したとは言えない」と認めません。勘過は検査する、真相を明らかにする。「天下が見えた」と云う言葉でさえ思ひもつかない表現です。慧稜和尚さんはどう応えるでしょうか。(続く)

テレホン法話(〇八九七四一・〇〇三三)

## 禪のたより



### ◆ 自にも不違なり、 他にも不違なり

先月、たくさんの夏百合をお供えいただきました。その中には、根の付いたものもありましたので、お堂の花瓶にそのまま入れてお供えしました。

その夏百合には、まだ若いつぼみが付いていました。お堂の中は日当たりがあまりよくないものですから、お花は咲いてくれるだろうか?と心配しながら、見守ることにしました。

案の定、数日すると心なしかつぼみが下向きに垂れてきたように見えました。なんだか、元気がなくなってきたなあ、お花が咲くのは難しいのかなあと、私も頭を垂れるような気持ちでした。花瓶の水替えをするときには、垂れたつぼみが折れないようにと、

慎重に水場まで運びました。

一週間ほど経つと、下の方の葉っぱが黄色く枯れだしました。ああ、もうダメかもしれないと思つたのですが、つぼみは頭を深く垂れているものの、色は青々としています。もしかしたら、まだ大丈夫かもしれない。慎重に、慎重に、水を替え続けました。

夏百合が花瓶に入つて二週間目の朝。お堂に行くと、白いお花が、開いていました。よかつた。夏百合は生き続けてくれて、花を咲かせてくれたのです。お堂のなかは虫があまり入らないので、残念ながら種はできませんでしたが、すっかり枯れてしまつたで見届けて、丁寧に供養しました。

振り返ってみれば、夏百合がお寺に来てから花を咲かせ終わるまで、私はこの夏百合と一心同体になつていたよう

に思います。夏百合は花を咲かせようと頑張る、私はなんとか花を咲かせてあげようと頑張る。夏百合がお寺に来てから枯れるまで、私の心は夏百合と共にありました。丁寧に水替えなどをして、夏百合のために心と体を働かせました。もちろん、夏百合がどう感じていたかは分かりません。でも、私の心内では夏百合との間に壁はありませんでした。

『修証義』というお経の中に「自にも不違なり、他にも不違なり」という言葉があります。同行といつて、自己と他者との間に壁を作つてはならないという教えです。人は皆、生まれた場所も、育つた場所も、生きている場所もそれぞれです。私たち人間は、夏百合とは違つて、互いに言葉を交わすことが出来ます。互いに思いを伝えあうことができます。

素直な心で思いを伝えあひ、心を通い合わせることで、穏やかな日送りが出来るはず。自にも不違な

り、他にも不違なり」

徳島県城満寺 田村航也師

令和五年九月十一日～二十日

### ◆ 禅的生活 学ぶはまねる

禅宗といえは坐禅。禅寺の修行は明けても暮れても坐禅ばかり…と、思われがちですが、実は、生活のすべてが修行であるというのが大切なところで。細かいところまで厳格に定められている食事の作法や洗面の作法。さらにはお風呂やお手洗いの作法に至るまでを、きちんと身につけていくことが大事であると言われています。

なぜそんなに作法にこだわるのでしょうか？それは「お釈迦さまのような生き方」というところに理由があります。私が住職をしているお寺のご本尊さまはお釈迦さまです。釈迦如来坐像と言って、坐禅の姿で坐っておられます。お釈迦さまは坐禅の修行をされ、弟子たちにも坐禅を勧めました。では、私たちが

そのお釈迦さまを佛さまとして、本尊さまとして尊ぶのは坐禅をしているお釈迦さまだけでしょうか？

そうではありませんね。お釈迦さまは、坐禅している時にももちろん仏さまですが、立っていても坐っていても、歩いていても横になっても、も、いつであつても佛さまです。ですから、お釈迦さまのように生きるには、坐禅をしていない時もすべてお釈迦さまでなければならぬのです。そこで「禅宗の修行は坐禅だけでなく、生活のすべてが修行」ということになってきます。

道元禅師さまも笠山禅師さまも、禅寺生活の細かいところまで、微に入り細に入り、懇切丁寧に教えておられます。本当の意味での親切です。それは、両禅師さまとも、お釈迦さまのように生きたいと強く思っておられたからです。私は、道元禅師さまの、食事の作法を教える中のお言葉が忘れられません。「お釈迦さまは食事の時に、お箸も匙

も使わず、手で食べておられた。だが、手で食べる作法が伝わっていないので、仕方なくお箸と匙を使うのだ」というお言葉です。道元禅師さまは、お釈迦さまの生活すべてをまねることで、少しでもお釈迦さまの境地に近づこうとお考えになったのですね。

「学ぶ」という言葉は一説に「まねる」→「まねぶ」→「まなぶ」となったと言われております。皆さんも、日々の生活の中で「これは素晴らしい、これは素敵だ」と感じることに会おうことがありだと思えます。そんなとき、それだけで終わらせるのではなく、ほんのわずかなことだけでも真似をしてみたいかがでしょうか？どんな小さなことでも、倦まずたゆまず積み重ねていくことで、「これは素晴らしい、これは素敵だ」と感じたことに近づくことが出来るはずですよ。

徳島県城満寺 田村航也師  
令和五年九月二十一日～三十日

### ◆ 本来の面目

私事ではありますが、先月末に四十四歳になりました。人生を振り返り年齢に感じます。最近は何の前にもただひたすら勤めている様に思う今日、ふと「本来の面目」を考えました。無門関二十三則に出てきます。

六祖慧能禅師は五祖弘忍禅師から禅法を継承して達磨禅師の衣鉢を授かりました。しかし先輩僧からの妬みなどを危惧し、慧能を逃がします。そして慧能を追った中で慧明上座が追いつきます。その慧能は、「この衣鉢は仏法の信をあらわす。力で奪うことは出来ませんが、持ち去りたければ持つて行くがいい。」  
「慧能は持ち去ろうとするが、微動だにせず、恐れおののき、  
「あなたを追ってきたのは法を求めたので、衣鉢の為ではありません。どうか私に仏法をお示し下さい。」  
この時慧能は、  
「善とか悪とかということ考

えることをやめた丁度その時、あなたの本来の面目はどこにあるか。」  
この言葉で慧能は大悟するのです。

本来の面目とは真の自己であり、善悪を離れ分別意識を離れたところに現れるのでしょう。

本来の面目は道元禅師様の有名な和歌の題名にもあります。  
「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すすしかりけり」  
今年九月二十九日に十五夜がありました。子供と一緒に見ましたが、秋というにはまだ暑かったです。しかし十五夜は中国伝来の風習。日本では稲作の収穫を終える頃、その収穫に感謝をしながら十三夜(旧暦の九月十三日)十四夜(旧暦の九月十三日)に美しい月を愛でる風習があります。今年十月二十七日になりました。十五夜をご覧になった方も、秋が深まった十三夜を見て、本来の面目を思つて頂きたいと思えます。

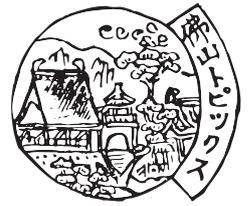
瑞應寺副典 足立光頭  
令和五年十月一日～十日



住友供養

■住友供養

十月一日(日) 毎年恒例の住友供養として、別子銅山殉職者並びに、新居浜住友連係会社殉職者の追悼法要が開催さ



■西祖忌

九月二十九日(金)、高祖道元禅師、太祖登山禅師の御征忌にあたる。前晩に特為献湯を厳修。当日に献粥諷経、正当献供諷経を門原後堂導師のもと如常に行行された。

■中国人殉難者慰霊祭

十月二日(月) 瑞應寺墓地内の慰霊碑前にて、中国人殉難者慰霊祭が古川副悦導師のもと厳修された。当日は晴天に恵まれ、参列者共々供養を行った。



鐘声

桜の季節に入堂し、気づけば紅葉が美しい時期となり、半年が過ぎようとしています。初めの頃は、以前とは大きく違う生活の中で戸惑うことも多くありましたが、様々な方に助けられて、無事馴れる事が出来ました。馴れては来ましたが、瑞應寺では毎日が学びの日々です。役寮の方々や古参和尚さんの皆様から色々な事を教えて頂き、雲水同士で、実践し確認し合い切磋琢磨する充実した日々を過ごしています。冬が本格的に近づき、寒さが厳しくなってきましたが、身心共に万全な状態で日々精進してまいります。 鐘司 龍衛

銀杏感謝録

- |     |        |
|-----|--------|
| 愛媛県 | 藤田博子 殿 |
| 北海道 | 大高 勇 殿 |
| 広島県 | 光福寺 殿  |
| 広島県 | 慶雲寺 殿  |
| 愛媛県 | 大通寺 殿  |
| 愛媛県 | 向雲寺 殿  |
| 静岡県 | 東慶院 殿  |
| 広島県 | 伝福寺 殿  |

(令和五年五月八日受付迄)

十月の日鑑

- |     |           |
|-----|-----------|
| 一日  | 祝禱        |
|     | 住友供養      |
|     | 日曜参禅会     |
| 二日  | 中国人殉難者慰霊祭 |
| 十日  | 参玄会(十二日迄) |
| 十五日 | 祝禱・略布薩    |
| 十八日 | 観音講・勉強会   |
| 廿一日 | 略布薩       |

十一月の予定

- |     |            |
|-----|------------|
| 一日  | 祝禱         |
| 四日  | 達磨忌速夜      |
| 五日  | 達磨忌正當      |
|     | 日曜参禅会      |
| 八日  | 参玄会(十日迄)   |
| 十四日 | 配役行茶・入寺式   |
| 十五日 | 土地堂念誦・庫司点湯 |
|     | 祝禱・小参      |
| 十八日 | 人事行札・略布薩   |
| 廿一日 | 観音講・勉強会    |
| 廿二日 | 太祖降誕会      |
| 廿三日 | 金毘羅秋大祭     |
|     | 略布薩        |

新卒の方も経験者の方も大歓迎

# 幼稚園教諭・保育士

## 教職員募集中

認定こども園 ひかり幼稚園は、  
 育まれた環境のもと、心身共に調和の  
 とれた子どもに育ってほしいと願い、  
 仏教を基本とした保育をおこなって  
 ます...

採用資格者として採用された方限定

- 賞与 年2回
- 長期休暇5日 年末年始休み
- マイカー 通勤OK (駐車場無料)
- ブランク OK

認定こども園 ひかり幼稚園

問い合わせ先: TEL 0897-44-7512  
 月曜日～金曜日 1000～1600